

# 聞名仏教

第 133 号 毎月発行  
(発行日) 2021 年 10 月 1 日  
発行所: 真宗大谷派念佛寺  
〒 663-8113 西宮市甲子園  
口 2 丁目 7-20  
JR 甲子園口駅下車歩 4 分  
電話 (0798・63・4488)  
(発行人) 土井紀明  
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp  
http://nenbutsuji.info/  
振替 00930 (7) 146886

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月 22 日 午後 2 時始  
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み  
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)  
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

# 念仏と呪術

佐々木蓮磨

先年、念仏は呪術であるか、呪術でないか、という議論が戦わされたことがありました。もちろん念仏というものは「ナムアマミダブツ」と意味の分らぬ言葉を口に唱えることであるからそこには一つの神秘性を感じるようになるのは当然です。そうになると、いつの間にかご利益というものが伴うようになって、呪術に陥るものです。

この危険性を極力避けようと努力されたのが、蓮如上人であったように思います。上人は念仏について「ただ称えては助からず」と言っていて、無意味な念仏や神秘の念仏を否定し、「六字のいわれをよく知った人が助かる」とハッキリ理解の念仏から自覚の念仏へと導いておられるのであります。そこで、従来「口に称え

る」ということが、念仏の常識であったにもかかわらず、「弥陀をタノムが念仏なり」とハッキリ信心が念仏であることを強調し口に称える念仏は助かったうへの報恩行として、お扱いになったのであります。

報恩行というと、なんだか特別の行のようにも考えられますが、実は「感謝の叫び」「喜びの叫び」であると言ってよかろうと思えます。

愛知県の妙好人おそのさんは常に念仏を称えて喜んでおられるので、ある人がおそのさんに向かつて、「あなたには念仏をよく称えられるので、お幸せですな」と言うとおそのさんは即座に「私の称える念仏は、カスほどでも役に立っては

とした信境ではありませんか。こんな信境の人には、呪術はもちろん、自力の入る余地はありません。

真宗の念佛は、南無阿彌陀仏の意味をよく聞きわけることが大切なのであります。そこで親鸞聖人は「聞くというは信心をあらわすみのりなり」と仰せられ、蓮如上人は「信心は聞くにきわまる」と教えられました。したがって口に称える念仏も、他力のいわれをよく聞いてみれば、称えしめられる念仏となって、ひたすら絶対他力を仰ぐほかはないことになるのであります。

そうになると、自分の称える念仏までも、称えながら聞くことになるのであります。即ち聞法の一手で貫くところが、真宗一流の念仏であると言わねばなりません。

以前に、私の地方にマサキという女同行がおりました。この人は極めて謙虚な態度で念仏をしておりましたが、いつも念仏を称えた後で、必ず「広大な慈悲さま」というのがつねでありました。そこである人が「マサキさん、あなたは念仏の後でいつも『広大な慈悲さま』と言われるが、念仏を称えるだけでは悪いのですか。」ときくと、マサキさんは「称えるだけで、この悪婆を助けて下さると聞けば、広大な慈悲さまと言わずにはおられません」と答えられたそうです。

平凡な言葉の中に、親鸞教学の極意が言い尽くされているように思います。この婆さんは称えながら聞き、聞きながら称えているので、〈聞〉と〈称〉とは他力信心の両面であります。他力信心の念仏は絶対行でありますから、呪術の入り込む間隙はありません。

(了)

# 攝取不捨の真理

②

(前号より続く)

こうした真宗の歴史の中で近世に出た清沢満之師は西洋哲学にふれ、迷うに

しても悟るにしても、善人であつても悪人であつても、

あるいは宗教を求めるとしても求めないにしても、今

ここで生き、何かを欲求しつつ生きている「自己」、そ

れはそもそも「何なのか」という問いを自らに問いか

けたのでした。この問いの中で清沢師は真実の自己を

成り立たせる無限者において、それを

「自己とは他なし。絶対無限の妙用に乗托して、任運

に法爾に此の現前の境遇に落在せるもの、即ち是なり」と

と表しました。

そして今の境遇に自己として在らしめている絶対無

限について、師の絶筆とい

うべき『我が信念』には「無能の私をして私たらし

めている能力の根本本体が如来である」

「如来は私に対する無限の能力である」

とも表しました。

自己存在の根拠として無限者すなわち如来の用きを

感得してそれを表されたのであります。如来の用きを

心の用きで表すだけではなく、単純に今ここにある存

在、その存在をして存在たらしめている用き、それを

「根本能力」として表したのであります。

前号で「アマダ仏のはかりなきいのちを離れては私

たちは一息もすることができませぬ。生きることも

死ぬることもできませぬ。」と申しましたが、このこと

を清沢師は、

「現前一念の心の起滅、亦自在なるものにあらず、我

等は絶対的に他力の掌中に在るもの也」

とか、「生死は全く不可思議なる他力の妙用によるものなり。」

と『絶対他力の大道』に述べておられます。

以上のようにアマダ仏の用きを私どもの存在をして

存在たらしめている能力(妙用)と表したことは、真宗

教学の歴史の中で画期的なことでした。

要するに迷っているにしても悟っているにしても、

善を行うにしても悪をなすにしても、行為する(存在

そのもの)は無限の能力であるアマダ仏によって存在

せしめられているのであります。自己存在の成立根拠

はアマダ仏であるといわれるのです。ですからその場

合のアミダ仏はアマダ仏の光明と言うよりは寿命、ア

ミダ仏の寿命無量の用きと言えましよう。

宗祖はもつぱらアマダ仏の光明無量の用きを中心に浄土真宗の教義を構築されましたが、清沢師はアマダ

仏を寿命無量でも語るとい

う視点を発表されたといえ

ましよう。いわば存在論で

語る真宗が登場したのであ

ります。

今ここにいる何ものか(個

物としての私)、それは何で

あり、何によって存在して

いるかという人間の普遍的

な問題の中で真宗を表して

いかれたのでした。

宗祖は『浄土文類聚鈔』

にアマダ仏の本質を、

「寿命延長、よく量ること

なし。慈悲深遠にして虚空のごとし、智慧円満にして巨海のごとし。」

と、アマダ仏の用きを寿命

と慈悲と智慧の無量なる用

きで表しておられますが、

これに対して清沢師は『我

が信念』にアマダ仏は、

「第一の点より云へば、如

来は私に対する無限の慈

悲である。

第二の点より云へば、如

来は私に対する無限の智

慧である。

第三の点より云へば、如

来は私に対する無限の能

力である。斯くして私の

信念は、無限の慈悲と、無限の智慧と、無限の能

力との実在を信ずるのである」

と述べています。宗祖はアマダ仏を(寿命と慈悲と智慧)で表し、これに対応して清沢師はアマダ仏を(能力と慈悲と智慧)として表しておられます。

このように宗祖が無量寿命といわれたのを清沢師は「無限の能力」と表現しました。

従来は寿命無量を慈悲の功德として語られてきましたが、清沢師は寿命無量を無限の能力、いわば個々の存在をして存在たらしめている「力」で言い表わしたのです。

こうして私たち(衆生)はアマダ仏の寿命無量によって今此処に存在することができ、寿命無量を離れて

私たちは一瞬たりとも存在しえないと教えられるのです。私たちは寿命無量の用きによつて今、今と落在しつつある。寿命無量のいのちの外に私のいのちはない。私の善悪のあり方や自分の才能や姿形の如何にかかわらず、寿命無量は私をして私たらしめている能力であつて、私の存在根拠として、私の行いの善悪を超えて、私を包み、私を掴んでいるのです。

こういう清沢師の問題意識と同質の問題意識をもつて、清沢師以後、真実の自己を追求していったのが西田幾多郎博士でした。

西田博士は仏教に理解のある哲学者として人間存在の根本構造に肉薄していききました。そして清沢師が言おうとした寿命無量と人(個物)との関係を博士はさらに論理的に表現しました。すなわち寿命無量を我を超越した用きとか実在界といひ、寿命無量(真実在)と人の関係について次のように表現しました。

「我々の自覚の本質は、我を超越したものの、我を包むものが我自身であるということがなければならぬ。」(西田幾多郎全集旧版第四巻。一二七頁)

「本当の実在界は我々が中にいる世界でなくてはならぬ。自分を包んでいる世界でなくてはならぬ。自分がその中にいる世界とは自分の知識の対象界ではなく、自分がその世界に生まれ、働き、死んで行くものでなくてはならぬ。それが本当の実在界と考えることが出来るものである」(同全集第十巻。一七七頁)

「無能の私をして私たらしめている能力の根本本体が如来である」と同じ(道理)でありましょう。すなわち、我を超越したものが絶対無限の妙用であり、それは我を包んでいるものでありつつ、真実の自己として今ここにいと。

無量寿のアミダが我(等)

を越え、我(等)を包んでいることは、有限は無限の中にあることであり、そのことは従来から言い尽くされてきたことですが、無限者が真実の自己である――我を超越しているものが、我自身である――という見解、これを取り上げられることは、真宗では殆どなかったと思います。自我しか知らない凡夫にとつてアミダ仏は絶対他者的な用きとしておおむね表現されてきたと思います。

ところがここではアミダ仏は真実の自己となつていゝ、と言われる。これは自我とアミダ仏の関係だけで宗教を語ってきた従来の教では殆ど言われなかつたことでもあります。

しかし現代ではそういう表現では十分対応できなくなつてきています。なぜなら近世以後、自己の存在そのものが問われてきたからです。

というのは自我(通常の私)は決して宙に浮いているものではありません。自

我は自我としての働きのありますが、それはどこを根拠として成立しているのかと問わずにはおれません。

自我はものごとを判断し選択し決断する能力ですが、その働きの今ここで働くことができるのは、自我の働きのそこにおいて働いていゝという場がなければなりません。それがいつてみれば「自己」であり、自己がなくて自我だけぽつんと働くことは当然できません。

ではその自己はどこにあるのか、それは自我が作り出すことはできません。自我はむしろ自己の中の一つの働きです。その自己は自我の作つたものではありません。自我がそこに於て働くところ、それが自己ですが、この自己は当然自我が設定したものではなく、自我ならざる「他」の働きのあります。

そこでこの「自己」とは何であり、どこにあるのか。それに応えたのが清沢師でした。

「自己とは他なし。絶対無

限の妙用に乗托して、任運に法爾に此の現前の境遇に落在せるもの、即ち是なり」で絶対無限なる「他」なる働きの自己となつて、現前の境遇に今、今と落在しつつある。ここに自己があります。この自己の一機能が自我でしょう。

そして絶対無限と自己と自我という三相構造になつているのが人間存在であるともいえましよう。

こうした構造を自我の立場から述べると、「アミダという絶対無限者が自己となつて現在化し、この私(自我)を支えてくれている。助けてくれている」と表現できます。ですから自我から言ふと絶対無限者は我ならざるものであつて絶対他者です。けれども自我なる私を今ここに真実の自己において成立させている無限者から賜つた自己であります。自己は自我のものではなく、逆に自我は自己のものであります。そしてこの自己は絶対無限からたまわつた自己です。

です。逆に迷いとは、  
真実の自己を見失い、自我  
しか知らず自我を（私）と  
して固定して深く執着して  
いる状態をいいます。

ただ真宗はどこまでも自  
我を立場として語りますの  
で、アミダ仏の働きは自我  
を越えた働きであって「私  
（自我）はアミダ仏である」  
とは決して言わないし、言  
えないのであります。しか  
し、「アミダ仏が真実の自己  
となって自我の私を支えて  
いる」あるいは「アミダ仏  
を離れて私は存在し得ない」  
「アミダ仏の外に私は無い」  
といえます。

(続)



# 信心 夜話

時々「聞法は命がけにな  
って法を聞かねばならない、  
とお聞かせいだいていま  
すが、私は真剣さが足りな  
いので、なかなか信心がい  
ただけません」という人が  
いて、何とか熱心になりた  
い、真剣になりたいと我が  
機にこだわっている。あ  
るいはまた「我が身は罪の  
深い人間であって地獄行き  
の者であると知ることが大  
事であるとお聞きしますが、  
なかなか地獄行きの私とは  
感じられないので困ります」  
という人もいて、何とか地  
獄行きの落ちる自分である  
と感じたいと、地獄行きと  
知られぬ我が身を責める人  
がいる。あるいはこんな話  
も聞いたことがある。ある  
聞法者は、「今夜にも死ぬる  
無常の身であるとよくよく  
知って聞法しなくてはなら  
ない」と、ある師から聞いて、  
何とか無常の我が身で  
あることを自覚したいと思

うがなかなか無常の身と感  
じられない。そこで意を決  
して、夜墓場に行つて、そ  
こで世を明かすことを何日  
か続けたが、それでも無常  
の身であると自覚ができな  
くて困つて松並松五郎氏を  
訪ねてこられた。その時松  
並氏は「我が身が無常の身  
であり、罪悪深重の地獄行  
きの身であることは法蔵菩  
薩様がすでに私たちの姿を  
見て知り抜きたまい、もし  
てこういう者を助けんと願  
を建て、五劫永劫の修行を  
されて、私を助けたもう南  
無阿弥陀仏になつて、今喚  
びかけておられる。それを  
今更私の方で無常の身であ  
り罪悪の身であると自覚し  
なければならぬと我が機を  
せめ、我が胸を相手にする  
のではなく、今ここで「助  
からぬ汝をまるまる助ける  
で念仏申せ」と仰せ下さる  
南無阿弥陀仏を聞くばかり  
仰ぐばかり」と。

香樹院徳龍師も、  
「後生大事でないから信が  
得られぬとて、いかほど氣  
を凝らし揉んでも何の所詮  
はない。また何時まで機を  
せめても大事にはならぬ。  
後生大事にせよと仰せらる  
るは、我が胸かきまわし、  
おだてかえすことではない。  
仕方のない未来、ただ御教  
化御慈悲にまっすぐにむか  
うより外はない。月夜に水  
を両手にそっくり汲み上げ  
てみれば、天上の月が手の  
中へ影を宿してまてしばし  
なしに宿りたもう。我々の  
胸の中へ御慈悲の影を宿し  
て下さるは、ただ御慈悲  
にすなおに向かうばかりな  
り。この方からなるのでは  
ない。知らぬ間に薫じつき  
香りついて下さるるのな  
り。」  
と仰せられている。今この  
「助からぬ汝を助ける」と  
仰せ下さる大悲の南無阿弥  
陀仏に「まっすぐにむかう」。  
ただ御慈悲をすなおに聞く。  
そこに、知らぬ間に大悲心  
が我が身に薫じついて、「あ  
あこんな者を」と大悲のお  
心に気がつくのである。

## 【住職雑感】

中学生の孫のクラ

スでコロナの陽性の生徒が出て、クラス  
全員がPCR検査を受けた。他に陽性の  
生徒もいたので、孫は陰性であったが残  
りの陰性の生徒達全員も家で一週間ほど  
待機することになった。こんなことで、  
コロナの影響を身近に感じるこの頃であ  
る。変異株がつきつきと出て来るような  
状況だから、コロナからは解放される日  
はいつのことになるのか。長い付き合い  
になりそうである。政府は、（感染者が  
出るのしかたがないが、出ても重症化  
せず死者が出ないように医療体制を整  
え、ワクチン接種で対応しながら、経済  
活動をもっと進めていきたい）というの  
が今後の方針のようである。  
「日本は他の国のようにロックダウン  
をできないのは生ぬるい、こういう場合  
にはロックダウンできるように法律を整  
えよ」という意見があるが、政府の力で  
すぐにロックダウンができるような国家  
権力が強力な国は良い面もある一方、間  
違つと大変こわい事にもなる。強力なロ  
ックダウンで感染を抑えた中国では、ウ  
イグル族の多数のイスラム教徒を收容所  
に集めて、イスラム教に随うよりも中国  
政府の方針に素直に従う者に変えていく  
思想教育をしていると聞く。日本でも戦  
前、国民に対して天皇を神とする国体に  
従順な人間になるように思想教育を徹底  
させていった負の歴史がある。政府の力  
が強くなりすぎるのは要注意である。